

## ⑥昭和戦後の店蔵、足袋蔵



昭和25年に経済統制が解除されると行田の足袋産業は息を吹き返し、再び足袋蔵が建てられるようになりました。その当時は材木が入手困難なこともあって、石蔵が多く建てられました。支柱を持たずに大谷石を積み上げて壁を造り、その上に屋根を乗せているのが特徴です。

戦後、新興の足袋商店も多数生まれ、「孝子蔵」、「小沼家の石蔵」など足袋蔵も再び建設されるようになりました。また、大正時代に足袋産業から派生した被服産業も台頭し、「舞原蔵」などの倉庫を建設しています。その後、昭和29年ナイロン靴下が発明されると、た行田の足袋産業は服装の洋装化とあいまって、翌年から足袋の需要は急速に落ち込んでゆきました。行田の足袋業界は被服、靴下、ハップサンダル、地下足袋など各種繊維産業へと転換していきました。服装の洋装化の進行によって、その後も足袋の需要は減少を続けました。

足袋産業の衰退とともに足袋蔵の建設は昭和32年で途切れ、商品倉庫としての役割も終えて遊休化して行きました。その一方で、『十万石行田本店店舗』のように建物のもつ歴史的風格を商業活動に生かした店舗も現れ、昭和50年代には、足袋蔵の再活用が議論されるようになりました。

